

批評及び紹介

ルメイ氏「暹羅佛教美術略史」

山 本 達 郎

Reginald le May, A Concise History of Buddhist Art in Siam. pp. xxi+166, maps 2, figs. 208. Cambridge: University Press. 1938

會々 An Asian Arcady (1926). The Coinage of Siam (1932) 其他の諸作を發表して暹羅の研究家として知られてゐたルメイ氏が、今回古代から西暦十六世紀に至るまでの暹羅の佛教美術史の概説を發表した。從來此の様な概説を試みた書としては A. Salmony, Sculpture in Siam. London 1925. 及び

ルメイ氏「暹羅佛教美術略史」

G. Cordes, Les Collections Archéologiques du Musée National de Bangkok. Ars Asiatia XII. Paris 1928 の兩書があるが、ルメイ氏は前者に甚だ誤謬が多い所から之を棄て、後者を出發點としてその研究を發展せしめてゐる。元來十三世紀及びそれ以前の暹羅の歴史は甚だ不明であり、此の時代に關する確實な所傳は極めて乏し。Lefèvre-Pontalis 氏が會々通報の誌上にタイ族の古代の歴史を取扱つた所の L'Invasion Thaie en Indo-Chine (1897, 1909) を發表して以後は、此の説を採用する研究家が相當にあつて、Salmony 氏の如くも Lefèvre-Pontalis 氏の提唱した所の年代觀に基いた立論を行つてゐるのであるが、併し此の Lefèvre-Pontalis 氏の説と云ふのは、各地の傳説的な所傳を無批判に採用してゐり、到

底俄かに信を措く事の出来ない性質のものである。然るに Salmory 氏のみならず暹羅の美術を取扱つた所の Voretzsch, Gangoly, Coomaraswamy 等の諸家は⁽⁶⁾何れもこの Lefèvre-Pontalis 氏に發する誤謬を踏襲してをり、暹羅美術の研究は從來甚だ誤つた方向に導かれてゐた。暹羅史の誤つた年代觀を是正して、主として碑文の研究によつて之を確實な基礎の上に置いたのは Coedès 氏であり、同氏は更にその年代觀に基いて美術史の研究を行つたのであつて、今回のルメイ氏の著書は此の正道に還つた所の暹羅美術史として最も良く纏つた好著である。元來暹羅美術史の研究は二十世紀初頭に Damrong 親王によつて創始され、Pradjadhipok 王の時代一九二六年に國立博物館の設立をみる事となり、Coedès 氏は此の博物館の蒐集品、特に彫刻を中心として研究を行つたものであるが、その後 Chacys 氏の暹羅各地の遺蹟踏査の報告⁽⁷⁾や、Dupont 氏の研究⁽⁸⁾其他が發表せられ、暹

羅の美術史・考古學研究の領域が一段と擴大されて來た。ルメイ氏は是等の結果を綜合すると共に、又可成りに多く未發表の新資料を提供してゐる。同氏は以前は暹羅政府の經濟顧問であつて長年暹羅に在住し、今回の著書に論及してある遺蹟は殆んど全部自ら踏査を行つて居るのであり、又暹羅美術品の蒐集家でもある所から、その著書の圖版に於ては自らの蒐集品四十數點を發表してゐる。猶ほルメイ氏の此の著書に關しては近着の The Journal of the Royal Asiatic Society, 1939, Part IV. 27 Coedès 氏の紹介文が掲載されてゐるから參照せられたう。

さてルメイ氏の著書の内容をみると、氏は暹羅の佛教美術を九つに區分して、

一 Pure Indian 即ち印度自體から齎されたもの——西曆五世紀まで。

二 Mon-Indian (Gupta)——五世紀から十世紀ま

で。

三 Hindu-Javanese——七世紀から十二世紀まで。

四 Khmer 及び Mon-Khmer の過渡期——十世紀から十三世紀まで。

五 Tai (Chiengson)——十一世紀から十四世紀まで。

六 Tai (Sukotai)——十三世紀から十四世紀まで。

七 Khmer-Tai の過渡期 (U-T'ong)——十三世紀から十四世紀まで。

八 Tai (Lopburi)——十五世紀から十七世紀まで。

九 Tai (Ayudhya)——十四世紀から十七世紀まで。

と爲してをり、佛教美術以外をも問題とするならば、此の外に婆羅門教關係の美術品を残してゐる所の扶

南式を數へなければならぬ事を一應注意する。而して著書の全體を十一章に分つて右の九つの區分の順序に従つて敘述を行つてゐる。

第一章は序説であつて、東洋美術と西洋美術の本質的な相違に注意して精神的要素の多い東洋美術に對する鑑賞態度を説明し、次いで從來の暹羅美術の研究に關する一瞥を行つてその誤謬を指摘する。

第二章には先づ暹羅を北部・中部・東北部及び南部半島地方の四つに區分して、各々の地方的な差違と暹羅美術の複雑性を説明し、その佛教美術を前記九つの様式に區分して後に、その第一の Pure Indian に就いて述べてゐる。即ち、グレコローマ式のランプの出土を以て有名な中部暹羅の Pong Tuk の發掘、馬來半島の Jaya を中心として行はれた Quaritch Wales 氏の調査並びに Nai Hong Navanugraha の發表した佛像に就いて説明し、恐らく西曆紀元一世紀から三世紀までの間に、印度から Amaravati 派の

佛教が中部暹羅の南部に輸入されたと認めてゐる。

第三章は Dvāravatī (Mon-Indian) 時代の暹羅に於ける製作品を取扱ふ。近來の碑文其の他の研究によつて、西暦最初の千年期の後半（及び恐らく前半の或る期間）に於ては、暹羅の地の支配的な民族が小乗佛教を奉じた Mon であり、そこに Dvāravatī 國の存在した事が明かにされた。Dvāravatī の佛像は青スレート色の硬い石灰石に彫刻されてゐて、印度の Gupta 時代の様式、特に Sarnath, Ajanta のそれに類似してをり、又一方カムボヂヤの Angkor Borey などに於て發見される原始的な彫刻とも類似してゐるのであつて、Gupta 様式が Dvāravatī を經由してカムボヂヤの地に影響を及ぼした事が認められる。又此の時代には青銅製の佛像も存在するが粗作であるといふ。ルメイ氏は Dvāravatī 様式に關する Coedès 氏の年代觀を修正して、此の Gupta 式並びにその退化形式の時代を四・五世紀から十世紀までとあり、次の Crivijaya 時代と年代的に平行するものと考へてゐるが、現在では Coedès 氏も亦此のルメイ氏の見解を是認してゐる。ルメイ氏は Dvāravatī 式の佛像を立像と坐像の二つに分けて説明してゐるが、最近の Dupont 氏の見解によると此の立像は更に三種に分類されるのであつて、その年代的な變化を一層詳細に考へる事が出来るであらう。

第四章は Crivijaya 國並びにその國の作と認められる所の Indo-Javanese (Hindu-Javanese) の様式に關するものである。Coedès 氏は曾てスマトラの Palembang を中心として大乘佛教を奉じた Crivijaya 國が南海に雄飛してをり、少くも西暦七世紀から十二世紀に至るまで南部暹羅の Bandon 灣に臨んだ Jaya 以南の地がその支配下にあつたといふ説を提唱してをり、Jaya, Nakhon Sri Thammarat に於ては此の國の遺蹟遺物と推定されるものが發見されてゐるのであつて、それに關する解説が行はれてゐる。

此の Crivijaya 國に就する Cœdes 氏の説に對しては Majumdar 氏 Quaritch Wales 氏等の反對説があり、ルメイ氏も此の反對説の概略を紹介してゐるが、その後 Cœdes 氏は更にその反駁論を發表してをり、又之に關する桑田六郎氏の研究が發表されてゐて、現在では Crivijaya 問題の研究は一層の進歩をみてゐる譯である。大體から言つて Majumdar, Quaritch Wales 兩氏の説よりも Cœdes 氏の説が穩當である。

第五章は扶南及び Khmer 時代であつて、兩國の歴史、特に後者の勢力の暹羅中部・東北部に派及した情況が考察されてをり、Khmer 時代にも佛教と共に婆羅門教の並存した事が說かれてゐる。此の章の政治史的な敘述には Parmentier 氏の所説が採用されてゐるが、正確を缺いた點が存する。ルメイ氏が隋書の赤土國を、遺物の發見に基いて、Menam 河の支流の Pasak 河流域に比定してゐるが、如きは最

も從ひ難い所である。此の章の終には、カムボヂャやチャムバの建築に度々みられる所の塔にして聖所を兼ねた Cikhara に關する考察があつて、ルメイ氏はこの起原を印度に求め、それを會て Beglar 氏の調査した所の Rajpur に近い Sirpur, Kharod の遺蹟と比較してゐる。是は暹羅の佛教美術とは直接關係ない様ではあるが、印度支那美術史一般の研究の上からみて極めて興味深い新説である。

第六章は Khmer 時代の續きである。Khmer 時代の佛像に於て Môn 様式の影響の存在する事實を注意して後に、暹羅中部東北部の遺蹟遺物に就いて順次に説明を行ひ、從來の説と異つて Lopburi の Pras Prang Sam Yot をも此の時代の遺蹟と推定してゐる。Mon-Indian の佛像に石灰石が用ひられてゐるのに對して Khmer のそれには砂岩が使用されてゐるが、兩者は之を作成する態度に於ても全く異つてゐる。前者が理想的な存在を表現する爲の抽象

的な觀念に支配されてゐるのに對して、後者は寫實的な人間に近い形となつてゐるのであり、更に次の「Tai」時代に入つて再び象徴的な傾向の強く表れて來る事が注意される。

第七章は「Tai」族の起原並びにそのビルマとの關係を扱つたもので、特に十一世紀頃までの「Tai」族並びにビルマの政治文化の狀態を要領よく概觀してゐる。

第八章には續いて暹羅とビルマとの關係を説明し、暹羅北部に於ける Chiengsen 式の興起を論じてゐる。即ち印度 Bihar の Pala 式の彫刻が Pagan 時代のビルマを經由して暹羅北部に影響を與へてゐる事を説き、又印度から直接暹羅に齎された彫像もあるとして、Chengmai にある佛像 Pra Sila の如きを後者の例として數へてをり、特に Tai 族の間に存する裝飾の多い様式 Pra Song Kriang 及び Pala 式の影響を推測してゐる。かくいつ Chiengsen 式の

古いものは恐らく十二世紀に屬してゐるといひ、Tai 族は暹羅に於て先づ退化したモンの藝術に接したが、次いでビルマを通して印度の新様式を輸入して之を採用したと認めてゐる。此の章は暹羅佛教美術に關するルメイ氏自身の研究として、最も勝れたものといつてよからう。

第九章は暹羅に於ける Tai 族勃興の歴史と Sukotai 式の起原を取扱ふ。即ちルメイ氏は先づ十三世紀の Meng Rai, Ram Kambheng 兩王の事蹟を紹介し、次いでメコン河中流域に新に現れた Sukotai の佛像様式が一方に Chiengsen 式の影響を受け、他方に於て Ceylon 島からの影響を被つた事を説明してゐるが、Ceylon 島から小乗佛教が輸入されて、之と共に佛像の様式が傳へられたといふ事實は、甚だ明瞭に敘述されてゐて讀者を首肯せしめる。暹羅に於ける最も有名な佛像 Pra Sising 亦此の Ceylon 美術の影響を受けてゐると云ふ。

第十章には Suk'otai, Sawankhalok (Sri Saechanai) の古都の地方に於て發見される Suk'otai 式の遺蹟遺物に就いて説明し、十四世紀の頃から此の様式が暹羅の他の諸地方、特に北部に派及した事實を説いて、Chiengsen, Chiengmai, Lampang Luang などの事例を列擧してゐる。

第十一章は中部暹羅方面を主として U-T'ong, Lopbur (Tai), Ayudhya の三様式に就いて述べてゐる。但し此の U-T'ong 式には頗る疑問が多く、その中に數へられてゐる佛像は多種多様であつて、ルメイ氏の示してゐる寫真からみても之を一つの様式として命名してよいかどうか未だ疑問が存する様である。ルメイ氏は U-T'ong 式の中に Khmer から Tai への様式の變遷を認めてゐるが、Coades 氏も注意してゐる如く、U-T'ong 式に就いては特に今後の研究を俟たなければならぬ。十四世紀に Ayudhya 王朝が成立してその統一が完成されるに及ん

で、美術上に於ても Ayudhya 様式が廣く行はれる事となるのであるが、その様式は次第に藝術的に退化した形となつて仕舞つた。Ayudhya 式の成立に關しては Suk'otai と Khmer の二つの様式の傳統が影響してゐる事を指摘してゐる。

此の書のルメイ氏の敘述は、結論を特に急ぐ事なく概して穩當であつて、同書は暹羅美術の概説書として最も推賞すべきものである。同書には又各時代に於ける政治史が略説されてゐるのであり、暹羅史に關する良書の乏しい現在に於ては、同書が、誤謬なことはしないけれども、一般に暹羅史の入門書としても注意されるべきである事を附言して置く。猶ほ最近の BEFEO. XXXVII. 1938. Chronique. pp. 686-693. には Dupont 氏が暹羅の Nakon Patom, Kok Wat に於て發掘調査を行つた事を報じ、後者に於て Dvaravati 式の佛像の發見された事などを傳

へてゐる。

- 1 この紹介せんとするルメイ氏の著書にタイ國の事を通稱と稱してゐる所から、此の紹介文に於ては暫くタイ國と言はずして舊來の暹羅と云ふ稱を用ひる事とする。
- 2 E. A. Voretzsch; *Indian Art in Siam*. Rupam. 1920.
- 3 O. C. Gangoly; *A. Group of Buddhist Sculpture from Siam*. Rupam. 1929. A. K. Coomaraswamy; *History of Indian and Indonesian Art*. 1929.
- 4 J. Y. Glaeys; *L'Archéologie du Siam*. BEFE-O. XXXI.
- 5 P. Dupont; *Catalogue des Collections Indo-Chinoises du Musée Guimet*. Paris. 1934. P. Dupont; *Art de Dvārvatī et Art Khmer*. RAA. 1935.
- 6 JRAS. 1939. Part IV. p. 646.
- 7 BEFE-O. XXXVII. 1938. Chronique. p. 687.
- 8 G. Coëtes; *A propos d'une nouvelle théorie sur le site de S'rivijaya*. *Journal of the Malayan Branch of the Royal Asiatic Society*. XIV. Part III. 1936.
- 9 桑田六郎氏、三佛齊考、臺北帝國大學文政學部史學科研究年報第三輯。同氏、三佛齊補考、同上第五輯。

リヤザノフスキー氏「シベリア遊牧民の慣習法」

矢澤利彦

Riasanovsky, V. A.; *Customary Law of the Nomadic Tribes of Siberia*. pp. 151. Tientsin, 1938.

支那法及び蒙古法に關する幾多の勞作を矢繼早に發表して學界に多大の寄與⁽¹⁾をなしつつある V. A. Riasanovsky 氏は、「昨年又もや」シベリア遊牧民の「慣習法」と稱する一書を公けにされた。この新著はキルギス族、オスチヤーク族、ヴォグル族、サモエード族、アルタイ族、テリユート族、ブリヤート族、ツングース族等に關して現存する諸法典を檢討し、その據所と根本的特徴とを個々の法典の中に求め、次いでこれらの民族の慣習法に共通な特色を見出さんとしたものである。今本書を紹介するに當つて各民